

## 黒羽芭蕉の館だより ②②

### かさねちゃん人形

今回は、「かさねちゃん人形」(直篋 浩子氏制作)を紹介します。

過日、作者の直篋氏より当館に寄贈いただき、現在「芭蕉展示室」にて展示中です。

割り箸の箸袋に「かさねとは八重撫子の名なるべし」の句が書かれ、その下に「かさねちゃん人形」が付いています。体は爪楊枝でつくられ、綺麗な着物をまとった、おかつぱ頭の少女です。

松尾芭蕉の『おくのほそ道』「那須野」の章には、旅を続ける芭蕉が那須野において「草刈る男」に歎き寄りつて放し飼いの馬を借り、黒羽を目指して行くこうとするとともに、2人の子どもが馬のあとについて走って来る場面が描かれています。ひとりはおかわいらしい少女で、名前を聞くと「かさね」というあまり聞き慣れぬ名で、いかにも優雅に思われたため、曾良が「かさねとは」の句を詠んだとされています。

この句は、「かさね」というのだから、花卉の重なったかわいい八重撫子の名であろう。この少女の名前に

ふさわしく、愛らしい名前だといった意味です。撫子は、和歌や連歌以来、かわいい子どもの暗喩として詠み継がれてきた言葉です。

また、「かさね」という言葉には襲の色目、つまり重ねて着る衣と衣との配色や、衣の表と裏の配色という意味もあります。『おくのほそ道』本文にも「やさしかりければ」(優雅に感じられたので)と記されているように、この言葉からは平安朝的な雰囲気を感じられます。

『おくのほそ道』「那須野」の章や、展示中の「奥の細道画卷」複製と合わせて、この美しく着飾った「かさねちゃん人形」をご覧いただければ、さらに興味深いものがあると思います。



かさねちゃん人形

#### 問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

## 彫刻

### 市内で作られた作品とその作者

## 周遊 ④⑥

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介します。

この作品は那須野が原ハーモニーホール南側の芝生広場に設置してあります。

楕円形の台座の上に角を丸めたバスの様な形をした彫刻が載っています。彫刻の底辺部には4つの起伏があり、見ようによっては4つ足の生き物に見えます。



基本的には滑らかなるまで表面は磨かれています。一つの側面は川辺の崖のようにゴツゴツとした岩肌をのぞかせています。

この作品はタイトルのとおり繭玉

### 繭(内から外へ)

おくの 奥野 誠 日本 2004年

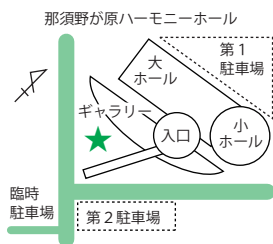
をイメージしたものです。作者は繭玉を境界として、その内と外の世界について思索を巡らせています。この繭の外側(私たちがいるこの世界)は一見すると無限に広がっているように感じられますが、この繭玉の表面が世界の境界線だと考えると、内側に対して有限であると考えられます。もしかすると私たちが外側だと思っている世界は実は内側の世界なのかもしれない、そのような考えも作者はこの作品に込めたようです。



奥野 誠 氏

作者は埼玉県生まれの奥野誠氏。国民文化祭いわて'93石彫展やメキシコ国際彫刻シンポジウムなど出展多数。

#### 設置場所案内図(★印)



#### 問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718